

いけばなの歴史

青 山 惇 彦 (植物)

理学部二号館植物に古流いけばなサークルがありますので、いけばなの歴史を調べてみました。

西暦 754 年(奈良時代)に大伴宿弥家持が、山吹と壺で眺めながら飲酒した。これが日本最古のいけばなとされている。

1113年(平安時代)に仏前供花のことが記されています。仏教信仰が上流貴族に受け入れられてきたのと並行して、仏前の供花を瓶子や壺、皿などに水を入れた中に挿して献ずることが一般化した。花摘はなつみ道心どうしんとか花衆けしゆうとかいわゆる僧侶が指定されるのは、もっと後のことであるが、とにかく寺僧の勤めとしては、この花の献供という作法があった。そして仏

の花とよばれるシキミや、本来仏教に縁の深い蓮の花などを、水をいれた物に挿し供えることが行なわれるようになった。ただ花を自然のままに仏前に横たえておくとか投げ出しておくのではなく、これを生かすように用意をもって供花となった。平安朝から中世にかけて、京の高雄の神護寺で催される法華会の第5日、桜の枝に捧物ほうぶつをつけて男女が多数、この山に登っていった。仏教行事と花との関係はほかにも、念仏による極楽往生を祈念する傾向が強まっていた間に、多様になっていった。その仏前供花の思想伝統が、中世には立花の花道を生み出す契機ともなる。公家女房たちには花は、日常の話題とし



て頻繁にのぼるようになり、人生を花にたとえたりして遊んだりすることもあった。

中国の宋代には花卉園芸が著しい発達を示したが、その影響は平安末期の公家生活に及んだ。園芸を楽しむ中で、品種の多様化をはかるとともに、花を草木とあわせて手折ったとき、それぞれの花の美しさとどめず、枝葉を全体に美しくすることを求めるようになった。そうすることによって面として、立体として、周囲に調和させる中で美しく造型することまで現われてきた。

南北朝から室町時代にかけては、戦国の世に代表されるように、公武の人びとは互いに疑心暗鬼で人を見るようになったが、個人の實力に自信のないものは、他の仲間にする必要があった。そこで平素の協同性を確認し合える機会として、茶の湯や連歌、能楽鑑賞など、種々の寄合が、公家、武家の間で度々開かれたものである。こうした寄合の流行の中で、花会という催しも流行した。この頃になると花瓶に込められた花の草木を挿し立てたもの

のようである。

1418年（室町時代）日本最初の插花家である立阿弥の名前があります。当時将軍家は、花会の季節だった七夕はもとより、2月は紅梅、水仙、5月は夏

菊、立秋には仙翁花というふうに季節の草花が諸家から進上され、それがさらに禁裏へ贈られるというのが、年中行事となっていた。それらの花を将軍家では同朋衆がいて殿中の飾りとした。その役を立阿弥がした。この時代に座敷飾りを法式化した、芸阿弥も出た。この法式は今日でも伝統花がいきづいているのと同じに座敷飾りも生かされている。

「なげいれ」のいけばなが最初に見られる文献は、室町期のいけばなの秋伝を編集した「文阿弥花伝書」に、「なげいれ花と云事はふねのはなの事つむなり口伝」とある。なげいれが茶の湯の愛好者に好まれ、茶の席に飾られるようになった時代がある。1572年から1590年までの茶会の日記「津田宗及日記」に、季節の草木や花を「御馳走とし」て「いれ」とある。利休による茶の湯の大成の中で、位置づけられた茶の湯のなげいれ（茶花）は小間の茶室における象徴としていちづけられた。元禄年間には、紀の国屋文左衛門に代表される巨万の利益を得た新興町人達は、伝統の重みを感じない自由人達でもあって、彼らの日常生活の奢侈とあいまって広がっていった。

1529年には現存する日本最古の花伝書「宗清花伝書」が書かれた。著者は不明。

自然の草木を手折り、瓶などに「たてる」という思考とその所作は、この世に「たて花」といういけばなを咲かせた。「たて花」が全盛をきわめた時代は、1492年から1952年（室町時代）である。「たて花」が7、80年を経て後に「立花」として変わったと思われまふ。「たて花」が「立花」と呼ばれるようになったのはいつであるかわかりませんが、江戸初期1683年に刊行された「立花大全」があるのでこの頃と思われる。1542年に池坊専応が相伝した「花伝書」にもほぼ「立花」と思われることが書かれている。1594年から1800年（安土桃山から江戸中頃まで）は立花の全盛時代である。

1769年に古流初代・一志軒宗普が古流を創始した。1803年古流三世家元・関本理遊によって、古流「生花」（池坊の立花と同義語）が大成された。

明治維新によって政治行政機構の大変革によって多くの伝統的な文化遺産を失ったが、いけばなもまったく見捨てられた存在であった。

江戸で最大の流派として盛名のあった古流四世家元・関本理翁は「日々の生活の儀、殆ど当惑つかまつり候」と金沢の古流会頭近藤理清に援助をもとめた手紙を出している。古流は加賀藩の庇護をうけ、江戸と金沢に勢力を張っていたので、流そのものを

金沢に移すことで存続したが、江戸に本拠をかまえていたほとんどの流派は、その時期に中断または断絶してしまった。

明治の文明開化が始まる初年から、20年間はいけばな界にとって最悪の時期であった。しかも欧化政策によって、伝統的な立花はその主流の座を保つことができず、いけばなは沈滞期におちいった。しかし20年代から30年代にかけての明治政府の文教政策が国粹的な方向へと変革したので、伝統的な立花が再び陽の暈を見始めた。

やがて30年代に至って、西洋草花を花材とした盛もり花ばなが登場する。このことは明治の欧化政策による生活様式の西洋化は、いけばなを飾る空間を、床の間からテーブルの上などへと拡大させていった。この頃の盛花の創始は小原雲心によってなされたものだが、一般にその創始は、洋風建築の卓上におかれる水盤に色美しい西洋花卉を挿したことに始まるとされていた。

大正年間には、盛花は大衆の中に浸透し、大衆雑誌等によって、急速に広がっていったが、昭和初年にかけて自由花の運動が提唱された。自由花の運動

は立花という伝統的ないけばなに対してだけでなく、形式化におちいろうとする盛花に対しての警鐘でもあった。西洋草花を用いた新しい手法は単なる色彩的洋花の組み合わせを超えて、なげいれの中から自由さを、洋花の姿の中から日本人の情緒を汲み取ろうとした自由花の運動は現代のいけばなまでその影響が及んでいる。

近代いけばなの新しい芸術運動が自由花運動の延長として始まるかに見えたが、戦争によって中断され、近代いけばなが前衛という名のもとに出現したのは戦後であった。

終りに私達のいけばなサークルを紹介したいと思います。発足以来、今年で10年になります。始めは5人ほどの人数でしたが、現在15人の人達が稽古にきています。メンバーは植物、動物、化学の各教室と中央事務に勤務するうら若き？女性の人達です。この10年間五月祭でいけばなで数回参加し、対外活動も活発に行なわれています。特にこの2、3年間は著しい活躍である。これからも皆さんと共に楽しいサークルを旨として努力したいと思います。